

群馬県東部における古墳時代前期土器の様相について

— 赤城山南麓を中心に —

大 木 紳 一 郎

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

はじめに

1. 研究略史

2. 赤城山南麓における遺跡の分布

3. 土器編年と遺跡の位置づけ

4. まとめ

— 要 旨 —

弥生社会から古墳時代社会への変容のうち、日常使用の土器に見られる大きな変化について、従前より注目され続けてきたことは周知のとおりである。群馬県から埼玉県北部にかけては、とりわけS字状口縁台付甕に代表される石田川式土器の急激な普及と定着がその象徴的現象といえる。

石田川式土器の普及・定着の背景には、故地である東海地方西部からの集団移住といった見解が大方を占めている。この想定される集団移住について、その時期や規模、あるいは流入の様態等を示す具体的な事例に未だ不分明な点はあるものの、考古学的事実の解釈としては概ね首肯されよう。一方、群馬県の後期弥生社会の担い手であった在来弥生集団が、このような大きな社会変革の大波に対してどのように関与したのかについての議論は乏しい。これについて、近距離集団移住を含めた波状的同化説というべき考え方が提示されている。一方で、集団移住ではなく在来弥生集団の主体的な選択とする反論もある。

このような議論を進めるには、ともすれば考古学的事実から乖離しがちな解釈論を避けて、議論の基礎となる考古資料の位置づけを常に整備しておく必要がある。本稿では、赤城山南麓地域を対象として、弥生時代末から古墳時代前期にかけての土器の様相の変化を再検討しようとするものである。特に、これまで重視されてきた外来系土器群の様相から視点を変えて、在来系弥生土器とその遺跡の変容過程に注目したい。

キーワード

対象時代 古墳時代前期

対象地域 群馬県東部 赤城山南麓地域

研究対象 弥生土器 外来系土器

はじめに

本稿では、群馬県の弥生時代後期に河川流域ごとに定着、比較的安定した地域社会を形成してきた樽式土器の遺跡群が、古墳時代社会形成の過程で、どのように位置づけられるのかといった問題を土器から検討する。それは、樽式土器に代表される弥生文化が失われ、新たな古墳文化を受容し、その社会形成に参画していく道筋を探ることでもある。群馬県(上毛野地域)では、古墳社会の形成を考えるにあたって、主導的立場を占めたと思われる石田川式土器の集団の動態に焦点が当てられることが多かった。その石田川式土器を使用する集団は伊勢湾地域を起点とした東海西部系の移住集団か、その生活文化に参画・同化していった集団と考えられる。これに対して、在来弥生集団の果たした役割という点については、取りあげられることが少ない。戦争等によって滅亡してしまったわけでない限り、彼らは様々な形で古墳社会の中に取り込まれ、父祖から受け継いだ伝統的な樽式文化を捨てるという選択をすることになったのだろう。その経緯を理解するにあたって、とりわけ群馬県では、集団移住の可能性が高いとされる東海西部系関連の遺跡との関わり方を明らかにする必要がある。また、それ以外の外来系集団の存在にも目を配るべきなのは言うまでもない。異なる土器系統の集団関係を把握するにあたっては、彼らが日常的に製作・使用した土器様式の変容具合や混在状態を解きほぐす作業が欠かせない。単体であっても土器に表れた折衷・模倣・影響等の属性が著しく交錯する時期だけに、文様と器形の個性的特徴といった認識のしやすい要素に絞って比較検討を行うつもりである。さらに、詳細な型式学的検討は省くが、年代的序列を与え、遺跡ごとに主たる土器様式の変遷を見ていく。これにより、樽式土器ひいてはその集団の変遷について、時空間的な枠組みと動向を再認識できると考えている。

本来ならば、樽式の分布する範囲の全域を対象とすべきであるが、本稿では特に赤城山南麓地域を対象とした。その理由は、弥生終末期になってから、樽式土器主体の集落群が新たに形成されていること、また分布を異にして古墳社会形成の主導的勢力と考えられる石田川式の集落群や、さらに異系統の土器を主体とする別の遺跡群が並存すると思われる状況が看取されるからである。すなわち、出自地域を異にする集団が一定地域に進出し、古墳社会形成で重要な過程と考える同一化の様相を読み解くにあたって、絶好の検討対象地域であると考えられるからでもある。

1 研究略史

さて、弥生時代末期から古墳時代初めにかけて、群馬県では中部高地型櫛描文系の樽式土器、縄文施文系の吉ヶ谷式(赤井戸式)土器、伊勢湾地域の土器を母胎とす

る石田川式の存在がよく知られている。樽式は在来弥生集団の継続であり、吉ヶ谷式は埼玉県中西部から、石田川式は東海地方西部からの集団移住を想定した流入という背景で説明される。在来系後期弥生土器である樽式土器以外はすべて外来系の土器群であり、群馬県における弥生土器から土師器への転換は、樽式土器の消滅と外来系土器群の普及・定着の様相を解き明かすことで理解される。このことについて、かつては樽式土器と石田川式土器の二系統の関係性で説明されることが多かった。しかし、外来系土器の実態は、伊勢湾地域だけでなく、北陸系、畿内系、東海東部系、南関東系、東関東系が規模の大小を問わずに流入していることが判っている。流入の際に遠隔地を起点とする土器群は、途中経過地点の土器群をも混在する状態であった可能性が高いと考えられ、またその途中過程で型式変化することも想定すれば、到着地域である群馬県での土器様相は、上記した起点地域の土器群相互がかなり錯綜・混在した状態であることを、前提として認識しておく必要がある。ところで、このような外来系土器群の流入現象は、巨視的にみれば弥生時代後期末から古墳時代前期前半の時間幅でとらえられるが、すべてが同時に進展したわけではなく、各々が先後関係をもって流入してきたらしい。現在での認識では、吉ヶ谷式が弥生後期後半段階で最も早く、続いて伊勢湾系・北陸系・畿内系・東海東部系・南関東系・東関東系がほぼ同じころに流入したらしい。このうち、伊勢湾系土器群は関東地方北西部(群馬県域～埼玉県北西部)に定着し、古墳前期中葉以降は他を大きく凌駕していく。この定着・在地化した段階の伊勢湾系土器群が「石田川式」と筆者は理解している。このような遠隔地からの異系統土器の流入と定着の過程は、東日本の各地でも散見される広範な現象であり、おそらくこれを引き起こした根源は同じ要因であったろうと推測される。

群馬県内でみられるこのような現象は、在来弥生集団による自発的選択ではなく、多くの見解がそうであるように、外来系土器の故地からの集団移入によるものとの仮説(松島1968、梅沢1971、田口1981ほか)が有力である。筆者も群馬県における石田川式の普及と定着は、伊勢湾地域を起点とする集団移住を契機としたと考えているが、古墳前期中葉以降になって、それが他の土器様式を駆逐するように広範に定着していく背景には、広域供給を可能とする生産体制を伴った社会的インフラの整備、またそれを可能とする社会構造が成立しつつあったことを示していると考えられる。特に石田川式土器の象徴的形式であるS字状口縁台付甕(以下「S字甕」と略称)の大量普及は、薄甕製作といったその製作技術上の特殊性からも、従来の弥生土器における自前生産の枠を大きく超えた生産・供給システム存在を想起させる。従来までの見解に従えば、このような土器生産体制の変化は、新たに着

手された広大な未開地の耕地開発、大型古墳築造といった大規模土木事業を推進するための社会組織構造改革と一連のものであったろう。弥生後期末～古墳前期前半における遠隔地からの土器流入を、旧来の弥生地域社会が再構成されていく過程における初期的な現象ととらえるならば、それらの果たした役割を推測するために、まず在来系土器をはじめとして外来系土器群のそれぞれについて、地域における時空間的な動態を把握しておく必要がある。そのうえで、各々の土器群をもたらした集団の歴史的意義について言及されることが望ましい。

先述したように、群馬県における古墳時代前期社会の形成過程は、県央から南東部への石田川式土器を用いる集団の進出と定着で説明されることが多い。そして、その担い手が外来系集団、とりわけ伊勢湾地域を起点とする東海西部からの移住民であるとする説(以下「移植民説」と呼称)が有力視されている。これには、移住民の存在は肯定しても、社会形成の主体は在来集団によるものとの反論もある(友廣1994)。筆者は、土器だけでなく井戸祭祀や掘立柱建物の普及などを含めた「生活システム移動」(森岡1993)が想定可能なことから、東海西部勢力の一部が移住・定着したことは間違いないと考えている。ただし、その移住規模や移入の様態といった理解については未検討で、その主力を限定的に考えるべきか否かについて言及する用意はない。あえて、移植民説での課題を上げるならば、樽式土器を用いる在来集団の関与が見過ごされがちなことである。古墳時代前期まで食い込んで樽式土器の伝統を守り続けた集団が、古墳社会形成に全く関与しなかったとは考えにくい。その様態は集団や地域によって異なるだろうが、大規模な土木事業を必要とする新たな広域水田の開拓や、古墳築造など、多くの労働力を必要とする状況に無関係でいられまい。

以上のような在来集団と外来集団との関係性を明らかにする目的で、弥生終末期の樽式土器の変化過程とその集団の動向を具体的な分析事例をもって論じたのは、若狭徹氏だけといってよい(若狭1990)。若狭の分析結果で重要なのは、榛名山東南麓の井野川流域、赤城山南麓、利根川上流域、鎭川下流域などの地域ごとに「樽式系土器」(以後「樽式系」と呼称)から外来系土器への転換の様相、すなわち対応の仕方が異なること、このなかで井野川流域がいち早く転換し石田川式土器生成の基盤となったこと、赤城山南麓に出現する「樽式系」遺跡群は井野川流域あるいは渋川地域からの近距離移住の可能性を示したことである(若狭1990、1998)。本稿で取り上げる赤城山南麓の状況については、新たに判明してきた弥生後期後半の北武蔵地域での動向と関連させて、次のように要約されている(若狭2018)。

「古墳前期初頭になると、東海西部系集団の移入とともに吉ヶ谷式の拡散が起こり、(中略)赤城山や足尾山地

の山麓部には吉ヶ谷系集団」(若狭2018 p.314)が移住して低地部の東海西部系集団との住み分けが発生した。「赤城山南麓には上毛野西部から樽系集団や、信濃を経由してきた北陸北東部系集団も展開し、赤城山南麓では樽系集団、吉ヶ谷系集団、北陸北東部系集団が混住し、東海西部系土器を共伴するという複雑な状況」(若狭2018 p.315)となる。

今後に残された課題は、赤城山南麓に割拠した樽系集団の移住の目的は何だったのか、移住後の経緯はどうなったのかである。樽系集団の赤城山南麓への移住の時期が、外来系土器群の集団を主とする低地部進出、大規模開発の初期段階と重なるだけに、新たな労働編成の中に組み込まれるためとの想定は可能だが、故地から押し出されて、無住であった地域への逃避移転の結果かもしれない。また当初は逃避目的であっても、次第に低地部開発を主眼とした新たな集団社会形成に編入されていくことは十分考え得る。その検討にはまず、遺跡群の選地、存続期間、分布規模、動向、他の異系統土器集団との関係性等の状況証拠を明示することが前提作業になろう。

さて、若狭の一連の研究よりも研究史的に遡るが、群馬県東部における石田川式土器の普及・定着の前段階に、南関東の古式土師器が介在しており、「S字形複合口縁台付甕形土器を主流とする土器文化の露払い的役割」を果たすとの重要な指摘があった(梅沢1978)。この時点では古相段階のS字甕出土例が不鮮明であったこと、地域間での古式土師器の編年の先後関係把握が十分に進んで



第1図 古墳時代前期初頭の土器移動模式図
(若狭2018文献第5図を転載)

いなかったこともあって、群馬県内のS字甕の普及に先行する土器群の存在を検証することは困難であった。この想定は、やがて御正作遺跡(大泉町)や重殿遺跡(旧新田町、現太田市)、間之原遺跡(太田市)、上遺跡(太田市)等で南関東系の在来後期弥生土器の系譜をひく壺や甕の出土例が知られるようになったことで、ようやく再検証の機会が訪れたといえよう。また、当初「南関東系土器」には五領式が想定されていたが、現在では土器型式の特徴から、東京湾岸から南武蔵や相模、さらに駿河や東遠江までも含む東海東部地域を故地候補として広く検討すべき必要が生じている。また、石田川式生成の母体となった伊勢湾系土器群についても、県内での古相段階の出土例が増加してきたことから、これらの時系列上の先後関係についての見直しが必要となっている。

遺跡群の動向や地域社会形成の過程を読み解くための土器編年については、比較的早くから検討が続けられてきた。提示された編年案の時期細分や画期の考え方に多少の相違はみられるが、樽式土器が外来系土器との接触・影響を受けることで、文様消失や器種組成の変容などの移行過程を経て、やがて外来系土器の様式に置換していくとの考え方はおおむね一致している。この場合、問題があるとすれば、時系列を保証するはずの個別形式の型式組列よりも、一括出土資料による器種組成の比較結果が時期認定の根拠とされることが往々にしてみられることであろう。特に樽式土器や吉ヶ谷式と外来系土器が共存する場合に、型式の検討を経ずに共存事実だけをもって移行期の「古段階」に位置付ける考え方である。比較的大まかな時空的範囲の枠内ならば、弥生土器から古式土師器への変換過程の理解はそれでよいとしても、きわめて限定された時空間に存在した発掘調査資料の場合、必ずしも平均的な様相を示すとは限らない。また、在来弥生系である樽式と外来系土器群は、異なる系統である以上、それぞれの型式組列と型式編年が検討されてしかるべきと考える。筆者は故地での型式や器種組成を保った状態で流入した外来系土器群は、その後の土着化の有無にかかわらず、外部からの移住集団に端緒を持つと想定している。したがって、発掘資料にみる異系統土器の共存関係は、在来の樽式集団との共存状態を示すものと理解したい。樽式土器が外来系土器の影響によって古式土師器へ変化していくとの考え方は正しいにしても、その影響の大小強弱は異系統集団相互の関係性によって様々に変化することが容易に想定できる。例えば文様消失の進んだ「樽式系」土器は、後出的な時系列上の位置付けだけでなく、外来系集団との接触度合の強さ等によっても増減や出現の時期に影響することを勘案しておく必要がある。このような外来系土器群との接触が型式変化の大きな要素である場合には、他形式土器の組列との摺合せが欠かせない作業となる。後述するように、本稿では

樽式と外来系土器群との共存時期を再検討するための編年上の位置づけにあたり、代表器種の型式組列を時間軸と考えて行うつもりである。

2 赤城山南麓における遺跡の分布

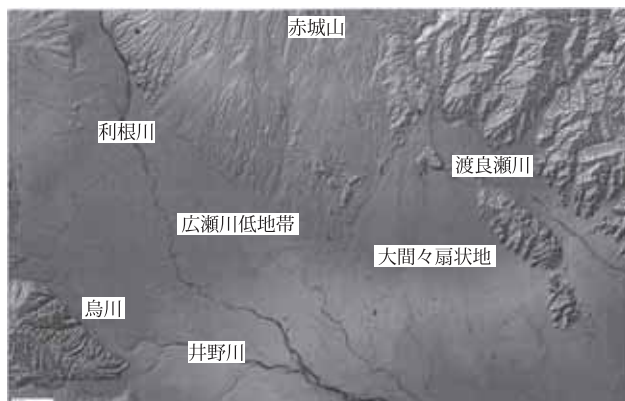
まず、本稿の対象地域である赤城山南麓の位置と地形の特徴について、簡便に述べておく。

赤城山は、関東平野の北西部で、北側を画す位置にある。標高1828mの黒檜山を最高峰とする成層火山であり、南半地域には利根川を主河川とする平野部が展開して遮る地形がないために広大な裾野が広がる景観を呈する。このため、山麓面積が広く、特に南向きの緩斜面が人間活動には格好の地形を発達させている。

この赤城山南麓地形は度重なる火山活動による基盤形成がなされ、その後の梨木岩屑なだれ(流れ山)、大胡火砕流、扇状地形成、地震による山体崩壊等を経て、現在の姿に至っている。南西斜面には約2万年前に形成された白川扇状地が展開し、扇端部は利根川の流路で遮られている。一方、赤城山南東麓には、足尾山地を流下する渡良瀬川が関東平野に接した位置から、広大な大間々扇状地を形成した。大間々扇状地には、西側に偏る古形成面(桐原面)と、中央から東半を占める新形成面(藪塚面)に大きく分けられる。古形成面の西辺は粕川で画され、扇央から扇端部にかけて樹枝状の谷底平野が形成されており、古墳前期の遺跡分布も点々とみられる。一方、新期扇状地である藪塚面では、乏水性の地形で扇頂部から扇央部までは弥生時代～古墳時代の遺跡が殆ど見られない。大間々扇状地上における本格的な農地開発は古墳前期から始まり、その遺跡は扇端付近に点在する湧水近辺から下位の地形面で見られる(加部2010)。西辺を画する粕川左岸では、樹枝状に形成された谷底平野に面した古墳前期の集落群が形成されている。

白川扇状地と大間々扇状地に挟まれた中央の山麓地形では、荒砥川をはじめとする中小河川が幾筋も南流し、これによって侵食された大小の開析谷が樹枝状に発達している。南麓地形の標高150m付近から上は、傾斜がややきつく谷の侵食が深い場所が多くなる。標高150～90mでは、ゆるい傾斜面となっており、谷底幅が広く谷に面する丘陵状地形との比高も小さくなり、水田経営には絶好の集落適地となっている。

白川扇状地からこの南麓地形の端部を遮断するように、北西から南東方向に広瀬川低地帯が延びる。現在は桃ノ木川、合流してから広瀬川が流下するこの低地帯は、かつては利根川が流下、侵食した地形であった。現在利根川は前橋台地の中央付近を南流して、前橋市南部で南東方向に向きを変える流路となっているが、これは中世後半の段階で変流した結果であることがほぼ判明している。したがって、中世以前の地形区分と遺跡分布の関係



第2図 赤城山南麓と周辺の地形

(国土地理院地図デジタル標高図「群馬県」をもとに改変)

性を考える場合、この広瀬川低地帯を境界として、北～東側の赤城山南麓～大間々扇状地地域と、南～西側の前橋台地地域に分けて考える必要がある。

この広瀬川低地帯は伊勢崎市南東端付近で利根川と合流する。この合流地点から北側で大間々扇状地と足尾山地際を流下する渡良瀬川との間には低平な沖積平野が展開している。現在は伊勢崎市、太田市、館林市のある地域で、度重なる洪水堆積物等に覆われた低台地や砂丘等の微高地が存在する。この平野部と赤城山南麓は、いずれも水田可耕地として適した地形環境といえるが、前者は広域な灌漑水路を擁してこそ生かされる地形であり、後者は安定した水利を確保できても開田面積に限界がある。さらに、前者の場合是有史以降も頻発した洪水被害の常習地であり、そのようなリスクを抱えた集落維持経営が必要とされる。

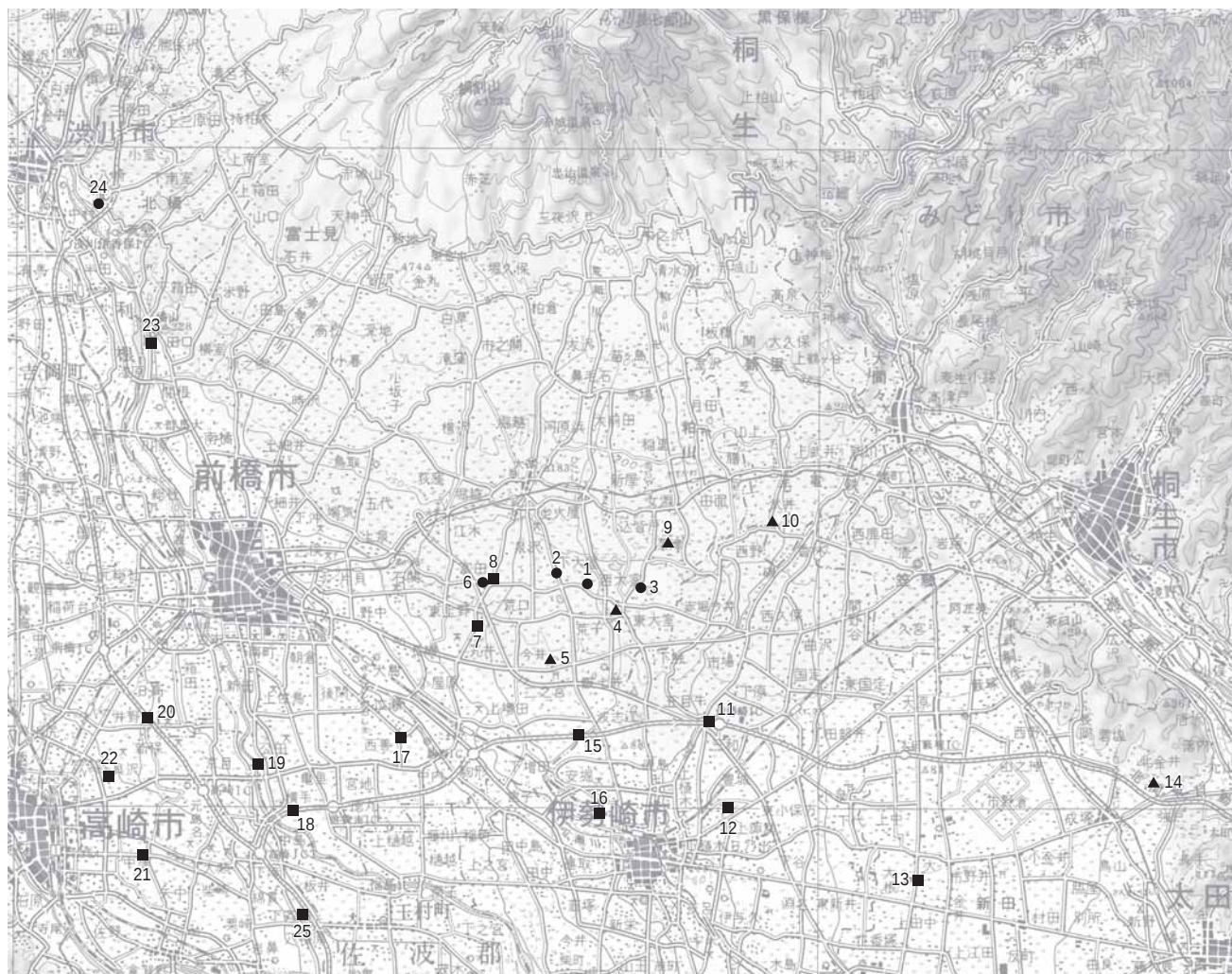
このような地形特性を踏まえたうえで、本稿で対象とする古墳時代前期遺跡の分布状況を見ていこう。

第3図は赤城山南麓を中心とした古墳時代前期における代表的な遺跡の分布を示したものである。ここでは、在来弥生系遺跡の動向と関連づける目的から、古墳前期でも前半段階から存在する遺跡に限ることとした。また、遺跡の表現には、●を樽式土器(「樽式系」を含み、以後は省く)を主とする遺跡で、ここでは便宜的に「樽系遺跡」と呼ぶ。▲は吉ヶ谷式土器の「吉ヶ谷系遺跡」、■は外来系土器を主とする「外来系遺跡」を示す。なお、いかなる土器様式を主体とするかは、本来ならば出土土器総体の量的比率による認定が望ましいが、現実的に一個人の尽力ではむづかしい。ここでは、公開された報告書掲載資料を対象として、認定可能な土器様式に基づく区分であることを断っておく。さらに、器種として壺と甕に重点を置いた区分であることも付記しておく。古墳時代初頭には遠近距離の土器移動が広範にみられることから、複数の様式土器が混在するのが実態である。したがって「主

たる様式」を区分するにあたり、それを製作使用する集団の出自を最も表現しているであろうと想定される壺と甕を重視したことになる。そして、異系統土器群のなかで最も量的に多く主体をしめる様式であることを区分基準とした。なお、取り上げた各遺跡はそれぞれ継続期間が異なり、その長短を無視した総体としての区分であり、遺跡によっては、途中段階で異系統様式に転換することにも十分に考え得る。この個別遺跡の変化については第1表で取り上げることとする。

まず、赤城山南麓の中央南半地域に樽系遺跡が分布するのが明瞭である。この代表例は、明神山遺跡、村主遺跡、東原B遺跡、内堀遺跡であり、西側を流下する荒砥川の右岸の富田地区でも富田西原遺跡、富田宮田遺跡等が分布する。大まかにみれば、標高110～140m、東西幅7kmほどの範囲に分布が重なる。第3図では横長楕円形の範囲内にみられるが、もちろんこの範囲外でも、五目牛新田遺跡のようにやや離れて存在する遺跡はある。ここでは、一定期間継続的に営まれ、遺跡分布密度も比較的高い場所として、樽系集落の拠点的分布域と想定した。東西方向に分布する傾向は、南麓緩斜面のなかで、開析谷ごとに最も水田経営に適しており集落立地としてもふさわしい地点を選んだ結果と思われる。集落遺跡の営まれた地形は、開析谷に面した低い丘陵で、水田可耕地である谷底まで比高の少ないわずかな傾斜面となっている。このような樽系遺跡の立地傾向は、その主要分布域である群馬県中～県西部、とりわけ榛名山南東麓の井野川中流域や、渋川市域の利根川右岸と同等の地形条件といっていよい。他に県西部の鐙川流域、碓氷川流域、吾妻川流域、利根川上流域でも後期の樽系遺跡の分布は密に見られるが、これらの地域では段丘が発達する地形で、低位の微高地が少ないため、水田可耕地を見下ろす段丘上に立地するケースが多いようだ。この立地傾向を積極的に評価するならば、樽系集団が水田経営のための集落立地として最も望ましいと考える地形が赤城山南麓で選ばれたと推測できよう。なお、赤城山南麓から南で、樽系遺跡群分布域から3kmほど離れた標高85m前後の蟹沼東古墳群では、方形周溝墓から樽式土器の壺・甕・高杯のセットが小型器台をともなって出土している。その東側に隣接する五目牛新田遺跡では樽式主体の集落が形成されているので、本来は集落域と墓域の組み合わせで構成される樽系集団の遺跡と認定できよう。この地点は赤城山南麓から隔絶しているわけではなく、南麓を流下する神沢川と桂川に挟まれた微高地先端付近に位置していることから、樽系遺跡分布の南端に形成された遺跡例と言って良いと思う。ただし、第1表に示したように、五目牛新田遺跡は前期中葉以降に石田川式に転換することがわかっている。

樽系遺跡に対して、吉ヶ谷系遺跡の分布は、堤頭遺跡、



国土地理院1/200,000地勢図「宇都宮」図幅を編集・加工

0 1 : 200,000 10km

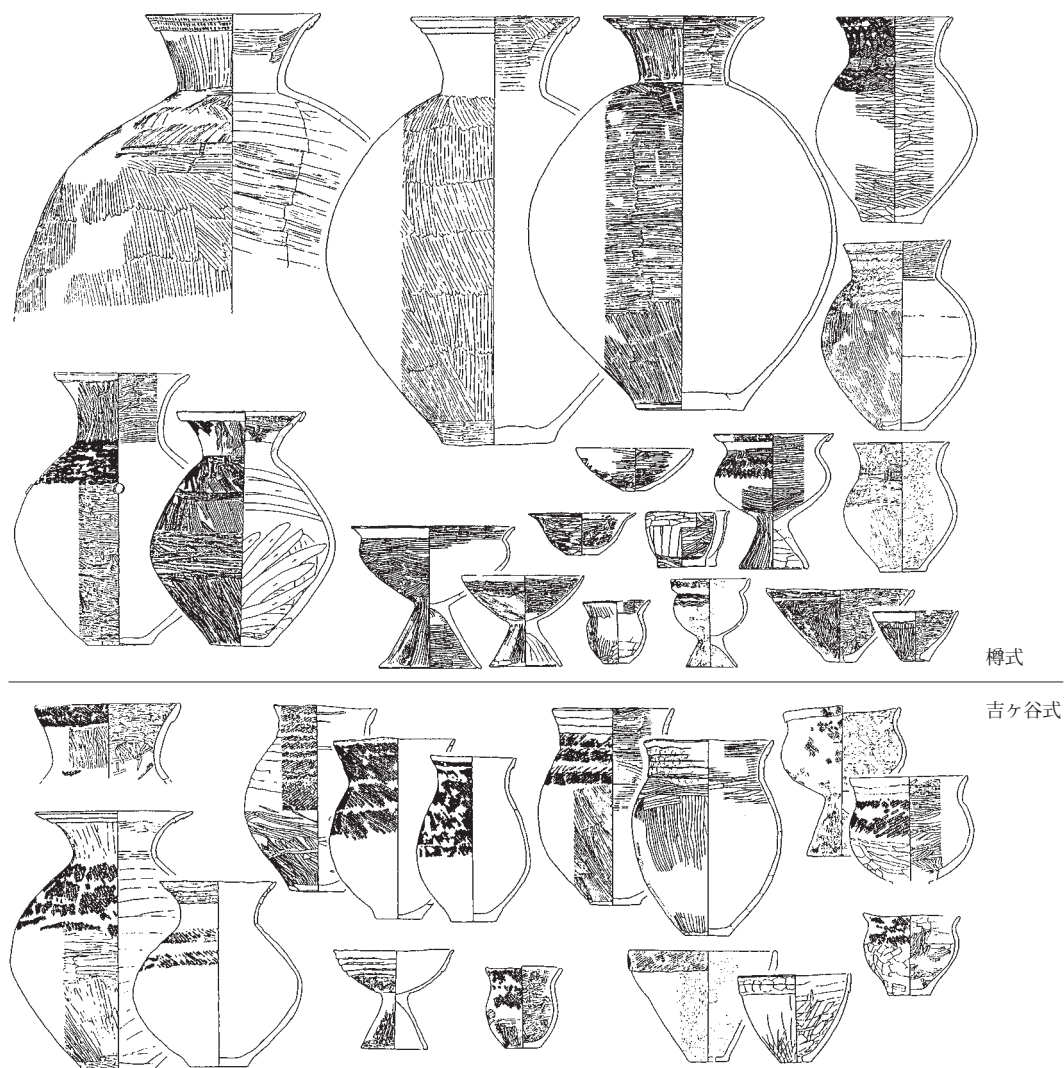
- 1 明神山 2 村主・中山B 3 内堀・上縄引(西大室) 4 西大室上諏訪 5 荒砥上ノ坊 6 富田大泉坊 7 荒砥前田II 8 富田西原・富田高石
9 堤頭 10 峯岸山 11 三和工業団地・舞台 12 伊勢崎・東流通団地 13 重殿 14 成塚向山古墳群 15 波志江中野面 16 喜多町
17 山王若宮・山王若宮II 18 横手湯田 19 公田池尻 20 新保 21 中居町一丁目 22 貝沢柳町 23 田口上田尻・下田尻 24 北町 25 下斎田
- 樽系 ▲吉ヶ谷系 ■外来系

第3図 赤城山南麓の古墳時代前期遺跡分布

西原遺跡、峯岸山遺跡など、器台などの供献器種を除けば異系統土器を含まない遺跡が、赤城山南麓でも標高150～180m付近のやや高い位置にみられる。また、向山古墳群(太田市)のように、大間々扇状地東辺に延びる丘陵地形の小高い地点に立地するのも特徴だろう。そして、西大室上諏訪遺跡や荒砥上ノ坊遺跡のように、樽系遺跡の主分布域に入り込んだり、接して存在する点は、樽系遺跡群との関係性を理解するうえで重要と考える。さらに、このことは、吉ヶ谷式土器がかなりの高率で樽系遺跡群に参入して、折衷型式を多く生み出していることとも深い関係がある。両者の関係が比較的密接であったことはすでに先学の検討によって明らかであるが、このよ

うな遺跡分布状況からも、人的交流の結果との解釈にとどまらず、同一地域内での共生、あるいは同一集落内での共住も十分推測可能といえよう。

外来系遺跡の分布は、従来から指摘されるごとく、傾斜の少ない平坦な低地、あるいは河川に沿った下流域に分布している。ただし、ここで区分基準とした外来系土器は石田川式土器及びその母体となる伊勢湾系土器群だけではない。特に注目する必要があるのは東海東部～南武蔵系であろう。ここでは西遠江から駿河、相模、南武蔵地域を含めた広域で扱っているが、筆者の力量不足のため地域を絞り込むことができない。また、おそらく流入経路にあたる経由地の土器を内包した状態で流入し



第4図 樽式土器(「樽式系」)と吉ヶ谷式土器

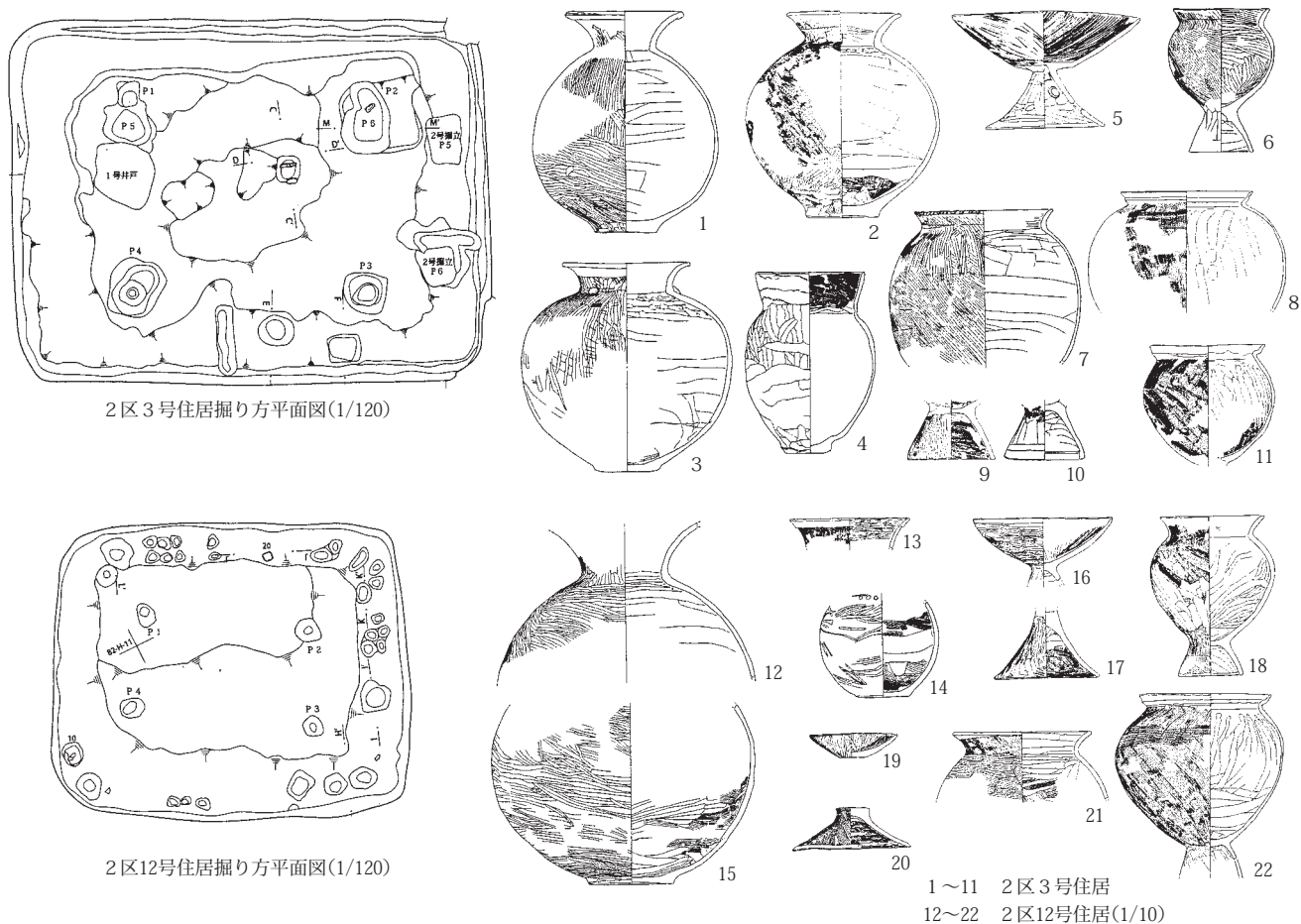
た可能性が高く、それらが混在しているため、さらに在地化で変容しているものも少なからず見られること等から、故地を限定できなかった。個別土器では駿河系あるいはその影響を強く受けた例が多いとの印象を持つが、本稿では「東海東部系」で総括的に扱う。

北陸系については、北東部の土器の分布がよく知られている。装飾器台あるいは結合器台と呼称される例については、北陸系のほかに関東地方で変容・発展した類型も多くみられることから、一概に「北陸系」で扱うことは避けた。北陸系として認定できるのは、いわゆる「千種甕」(川村1993)と呼称される「く」の字状口縁を持つ小平底の甕であろう。ほかに、「5」の字状の有稜段状口縁をもつ壺・甕類、外反屈曲する高杯や器台、半球形有孔鉢などがあるが、在地化タイプや模倣品の類になると、区別のつかないものも多い。

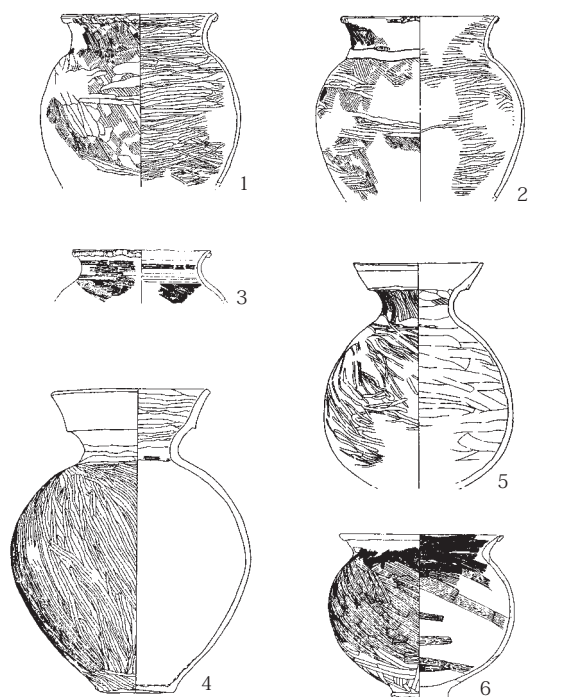
なお、網目状燃糸文の壺や、単口縁で広口の平底甕、

あるいは比較的脚部高の高い単口縁台付甕等は古利根川下流域から東京湾岸からの流入を想定できるが、群馬県南東端以外では単体で点在する程度で、遺跡の主体を占めるとの認定は現状ではむづかしい。同様に茨城県北部の十王台式の流入も知られるところだが、現在までのところ西太田遺跡(伊勢崎市)近辺以外で密な分布を見せていない。これらは群馬県内に流入した外来系土器群の一角を占めるものだが、地域間交流や土器交差編年での重要な資料ではあっても、遺跡群の動向を検討するに欠かせない出土例が見られない以上、ここでは除外せざるを得ない。

さて、外来系土器のうち、まずは伊勢湾系及び東海西部系土器を主体とする遺跡分布を見てみよう。伊勢湾系と認定する代表的土器はS字状口縁台付甕(以下「S字甕」と呼称)である。しかし、S字甕を甕の主体として用いる遺跡は、本地域より南東側の平野



第5図 荒砥前田Ⅱ遺跡出土土器



1～4 荒砥前田Ⅱ 5 舞台 6 三和工業団地Ⅰ(1/10)

第6図 駿河系・北陸系の土器

部、広瀬川低地帯の南西側に広がる前橋台地に主分布がある。赤城山南麓の南側でまずあげられるのは喜多町遺跡(伊勢崎市)である。この遺跡からは、廻間Ⅱ式古段階の器台、パレススタイル壺、S字甕b類が出土しており、それ以降にも継続して伊勢湾系土器を主流として用いることが判明している(松島1986)。これよりやや遅れて出現する集落・墓群の波志江中野面遺跡(伊勢崎市)は、喜多町遺跡の北西に2 kmほど離れており、やはり伊勢湾系土器主体で、パレススタイル壺も出土している。この地点は広瀬川低地帯の左岸で、南へのびる赤城山南麓地形の最南端にあたる。言い換えれば、古利根川の左岸にあって、赤城山南麓の樽系遺跡群から3～4 kmと日常的接触が可能な距離間隔を置いて位置する伊勢湾系遺跡群の橋頭堡的存在なのかもしれない。群馬県域に伊勢湾系土器が拡散してきた廻間Ⅱ式の貝沢柳町遺跡(高崎市)で代表されるように、広瀬川低地帯の南西に広がる前橋台地は遺跡分布の多い井野川流域を擁し、早くから伊勢湾系土器を主流とする外来系土器に転換していく(若狭1990)。更に分布域を広げて東方の平野部の開発に乗り出す過程の中で、広瀬川低地帯の対岸地域、すなわち赤城山南麓～大間々扇状地南部地域への進出が試みられた

と推測するならば、この喜多町遺跡や波志江中野面遺跡の位置は格好の地点といえまいか。また、広瀬川低地帯の右岸には、遺跡規模は不明瞭だが、S字甕A類を出土した山王若宮Ⅱ遺跡が存在している。かつて古利根川流路であった広瀬川低地帯の左右岸に立地する伊勢湾系遺跡が廻間Ⅱ式期古段階であることを積極的に評価するならば、伊勢湾地域を起点とする集団が有力な流入ルートの一つと考えられる古利根川沿いを遡上し、赤城山の麓付近で拠点となる最初の集落を構えたとの推測も可能になるだろう。あくまでも地理的な位置関係からの推測に過ぎないが、これらの遺跡に限らず、広瀬川低地帯にそって発見される古段階の伊勢湾系遺跡には、そのような役割を帯びていた可能性をここで指摘しておくことにする。

外来系土器のなかで、これまで等閑視されがちであったのが東海東部系土器であろう。特異な形態の大廓式大型壺の東国への波及は、かねてより知られてはいたが、他の器種も含めた土器群の移動という視点では、伊勢湾系土器の拡散といった話題性に隠れて検討対象となることは少なかったようだ。ところが駿河湾岸に占拠する高尾山古墳の発掘調査成果が公表されたあたりから、研究対象に取り上げられる機会が多くなった。群馬県においては、新保遺跡(高崎市)141号住のS字甕B類を伴う東海東部系土器の存在が知られていた。また、赤城山南麓端の荒砥前原遺跡(前橋市)でも、文様と器形に東海東部系の影響が指摘できる。本稿で検討対象とした赤城山南麓とその周辺地域では、荒砥前田Ⅱ遺跡(前橋市 第5図)、荒砥諏訪西遺跡(前橋市)、富田西原遺跡(前橋市)など、赤城山南麓を流下する荒砥川の中流付近に分布が見られる。また、大間々扇状地の西端で、粕川左岸に位置する三和工業団地遺跡(伊勢崎市)と舞台遺跡(伊勢崎市)は本来同一と思われる、大規模な集落と墓群からなる東海東部系遺跡である。これらの分布上の位置は、伊勢湾系遺跡群が展開する南側の広い低地地形と、北側の赤城山南麓や大間々扇状地の緩斜面との中間地域にあたる。主客は別としても、東海東部系土器の分布状況からは、樽系遺跡群のように限定された地域に集中する傾向はうかがえない。その中であって、遺跡の規模の大きさや継続期間からみて、三和工業団地・舞台遺跡は、東海東部系の拠点集団になりえたと考えている。東海東部系土器の特徴は、口縁にめぐらす断面方形の凸帯、特徴的な下膨れの胴下半と突出気味の底部を持つ壺、肩部や頸部に部分的に付加する大きめの円形貼付文(第5図-3)、脚部高の低い単口縁台付甕、半球形状に開く大型鉢等があげられる。この中には大廓式大型壺の特徴を残す後継型式の壺や、明らかにその影響を受けたと思われる折り返し二重口縁の壺がある。ただし、これらの多くは東海東部系そのものというより、在地化した変容型式である。

大廓式大型壺は口縁内側に凸帯を巡らすのが大きな特徴だが、ここでは口縁外面に巡らすことでかなり違和感のある形状を示す例を多く見かける。荒砥前田Ⅱ遺跡では、台付甕の口縁や頸部に指頭押圧を加えた凸帯を巡らす例(第6図-1~3)があり、東海東部系としても特徴的部分だけを取り込んだ折衷品の可能性がある。同様の凸帯を台付甕の体部と脚部の結合部分に、おそらく補強を兼ねた装飾帯とする例が東海東部で見られるので(大野2004)、その装飾効果だけを模倣したとも言える。このように、部分的な類似型式ではあるが、他にそのモデルとなりうる様式は見当たらないのも事実である。単口縁台付甕の全体形状は東海地方東部から西相模にかけての例品に近く、当面は東海東部系と分別しておくことにする。このように東海東部系土器を捉えた場合、これに含まれる単口縁台付甕の出土例の多さと分布の広さが目につく。それと、遺跡によって主客の相違がありながらもS字甕との共伴例が多い点は注目しておくべきだろう。東海東部系土器の存在時期については、駿河湾での編年を参考にすれば、大廓Ⅲ式(渡井1998)を中心とした前後時期と考えられる。この時期には東海東部でもS字甕が普及・定着することから、これを含んだ東海東部系土器群として群馬県に流入してきた可能性は高い。もちろん、伊勢湾岸～西遠江の東海西部地域を起点として移動してきた場合でも、東海東部はその経由地となった可能性が高いので、当然ながら伊勢湾系土器群と混在状態での流入も想定しておく必要がある。それでも、本地域における伊勢湾系遺跡と東海東部系遺跡に主体となる土器群が分別できることから、同じ東海道筋の流入経路ではあっても、群馬県内では別個に定着した集団が存在したとの想定は許されよう。もちろん単口縁台付甕とS字甕の共伴事例が多いことから、両者が混在状態で定着した場合も想定内だが、その場合は土器の特徴だけで判断するのは難しい。

北陸系遺跡については、従来から指摘されているように(川村1998、1999)、群馬県内に広く分布するが、単体での共伴例が大部分で、故地での器種組成が揃うのは有馬遺跡(渋川市)と荒砥上ノ坊遺跡(前橋市)だけという状況はかわっていない。そして、在地品に模倣や折衷といった影響を与えた形式が、北陸北東部に主分布をもつ、いわゆる「千種甕」だということも同様である。赤城山南麓では、吉ヶ谷系遺跡である荒砥上ノ坊遺跡に少人数の集団が流入したと思われる、近辺の中屋敷Ⅰ遺跡や荒砥前田Ⅱ遺跡等で単品出土例(第6図-4)がみられることから、この小集団との交流による入手であった可能性がある。北陸系遺跡については、土器の分布は広くても、集団規模が小さく遺跡数も限られていることから、情報伝達や物流関連以外で、当地域における大きな勢力を持ったとは考えにくい。この様相は、阿賀野川流域沿い

に会津地方に展開した北陸北東部系遺跡群とは異なり、古墳社会形成の主力として参画したのではないと考えてよいだろう。

3 土器編年と遺跡の位置づけ

前節では、赤城山南麓を中心とした古墳時代前期の遺跡について、主体となる土器群による色分けと分布状況について述べた。ここで、土器の主体は報告に掲載された古墳前期前半の土器総体を対象としたが、遺跡によって存続時間幅が異なり、また遺跡単体でも時系列に沿った主体土器の変化があるはずである。ここでは、時間軸に従って各遺跡の存続時期を位置づけ、遺跡相互の同時性と、個々の遺跡の変化様相について検討したい。

まず時間軸の設定については、赤城山南麓の遺跡を対象にした深澤敦仁氏の編年案(深澤1998 以後「深澤編年」と呼称)の区分(0～5段階)をベースとする。ただし、深澤編年では器種組成の変化に重点を置いた区分のため、区分基準について筆者の見解とそぐわない部分がある。ここでその相違について述べておく。まず深澤編年の基準を以下にまとめた。

- 0段階―「安定した樽式土器の器種構成の中に異系統の土器が入ってくる(指標は樽式土器の様式保持)」
- 1段階―「外来土器が参入することに連動して、樽式系土器の構造が崩れ始める(指標はS字甕1類か器台登場)」
- 2段階―「外来土器が器種構成の主体を占め、樽式系土器は客体的存在(指標はS字甕2類の登場)」
- 3段階―「外来土器が上野化(在地化)し始める(指標はS字甕3・4・5類が主)」
- 4段階―上野化(在地化)土器群が盛行(指標はS字甕5類が主)
- 5段階―上野化(在地化)土器群が衰退(指標はS字甕7類と柱状脚高杯の登場、器台の消失)

時系列上の先後関係は、田口一郎氏によるS字甕の型式組列の考え方(田口1981)に準拠している。これについては筆者に異存はない。ただし、1・2段階におけるS字甕1類(伊勢湾地域におけるA類相当)・2類(同B類相当)を区分基準とするが、これらはまだ群馬県内で普及・定着していない極めて少ない型式であるため、これだけを指標にするには無理があろう。S字甕が普及・定着する3段階以降とは異なるのである。群馬県内で器種組成の中ではむしろ例外的な存在であるといつてよい。存在した場合には編年上の位置づけが可能だが、存在が確認できないことを理由に区分時期の先後に置くことはできない。また、伊勢湾からの土器の一次拡散が廻間Ⅱ式期に始まることを前提に考えれば、群馬県で出土する

S字甕A類(田口分類のⅠ類)は、廻間Ⅱ式期古段階の可能性もあろう。同様にB類相当のS字甕(田口分類ではⅡaとⅡbに細分、深澤は2類)の登場だけで一時期を設定するのは無理があろう。この点で、S字甕Ⅰ類(A類)＋Ⅱa類(B類古)をⅠ期、S字甕Ⅱb類の存在をⅡ期と区分した田口編年(田口1981)が実態に近いと考える。それでも、普及以前の段階でS字甕の存否を指標とするのはいかがなものか。伊勢湾系土器の流入が遅れた地域や遺跡では、編年的な同時存在性を検討できまい。筆者としては、普遍的な存在の土器形式の型式組列を時間軸に据えるべきと考えている。それが望めない場合には、複数の他形式で位置付けるしかないだろう。S字甕B類(田口分類Ⅱab類、深澤2類)が見られなくとも、高杯や器台の型式から判定できると考える。その意味では、深澤編年の1・2段階の区分基準は「廻間Ⅱ式期の古段階・新段階の型式が伴う」との理解でよいのではないかと。深澤編年での土器様式の変遷過程に関する理解は正鵠を得ていると考えるが、そのままでは出土資料を時間軸上に位置付ける指標とはならないだろう。そこにこそ型式学の方法が適用されるべきと考える。深澤が先に設けた段階設定の考え方は、土器変遷に関する仮説であって、それは出土資料の実態から検証さるべきものとする。

本稿の趣旨である樽式土器とそれを主体的に用いる遺跡の動向を検討するには、樽式土器そのものの時系列上の位置づけが欠かせない。これについて、筆者は赤城山南麓の遺跡を対象に、樽3期新段階～樽4期として位置付けたことがある(大木2020)。樽3期新段階は深澤編年の0期に相当する。問題は、深澤編年における1・2期での樽式土器(若狭分類の「樽式系」 若狭1990)の理解である。「樽式系土器の構造が崩れ始める」1期、「樽式系土器は客体的存在」の2期という考え方は、主に様式を構成する土器組成上の特徴であろう。この考え方による区分は、同一遺跡内での一括出土土器同士であったり、相当数の統計処理による比較ならば、ある程度有効と考えるが、偶然性の高い特定形式の有無や数量比較だけで系列上の先後関係を決定するのはむづかしいと考える。S字甕による時期区分と同様の理由で、赤城山南麓地域においては普遍的に存在する樽式の型式組列によって新旧の先後関係の指標としたい。最終段階の樽式土器の時系列変化については、若狭徹による「樽式系」の型式区分と組列案がよく知られている(若狭1990)。詳述は避けるが、榛名山東南麓の土器を対象として、器形や文様の形態化・無文化に基づく変化を基準としている。ここで示された型式組列の考え方にほぼ同意するが、赤城山南麓地域ではこの時期の樽式土器資料が充実しており、これらの資料を用いて改めて筆者なりの三段階区分を以下の基準で設定した(第7図)。なお、組列のための選定器種は、変化要素の少ない高杯・鉢類を除き、出土数の安定

した壺と甕を対象としている。型式分類では煩雑を避けるため以下のような簡略な分類基準を設けた。

壺A—文様を施す。口～頸部を無文とするAa類と、施文するAb類に細分する。

壺B—無文。

甕A—文様を施す。

甕B—無文。

甕C—異系統の文様を施す。ここでは佐久系の櫛描羽状文をあてる。

各型式の時間軸上の変化は、以下のように想定した。

- ①口～頸部形状が、長く弓なりの外反形状から、短く小さく外折気味の形状になる。
- ②胴部形状が、なで肩気味で縦長球形から、球形になる。
- ③頸部形状が、①と②の変化に応じて強い「く」字状の屈曲になる。
- ④甕の文様構成が、頸部簾状文と口～頸部及び肩部への波状文といった組み合わせから、簾状文の欠如や波状文帯の減少や乱れが現れる。

なお、折り返し口縁の形状については、幅狭く扁平な断面形状で一貫しており、区分基準となる変化はみられない。

以上に掲げた型式組列上の変化想定を検証するために、壺と甕の変化が整合すること、共伴する高杯・器台・鉢類・小型供献器種類との整合性を確認したうえで、以下の段階設定となった。

- I 段階—口～頸部が長く外反し、頸部付近が垂直に立つ。文様構成は樽式の定型が保たれている。壺Aa・壺Ab・甕Aで組成される。
- II 段階—口～頸部形状が全体的に弓なりで外反し、短くなる。甕の文様構成が施文部位の形状変化に応じて省略化が見られる。無文の壺B・甕Bが一定量を占める。
- III 段階—口～頸部が短小化し、中位で外折するか、直線的に外傾する。胴部形状に歪んだ球形が現れる。甕Aでは文様の形骸化が著しい。組成比率では無文の壺B・甕Bが主体を占める。

以上の段階設定で、I 段階は筆者による樽式編年(大木2020)の3期新段階に相当する。深澤編年(深澤1998)及び若狭・深澤によって再編された編年案(若狭・深澤2005)との対応関係の理解は以下の通り。

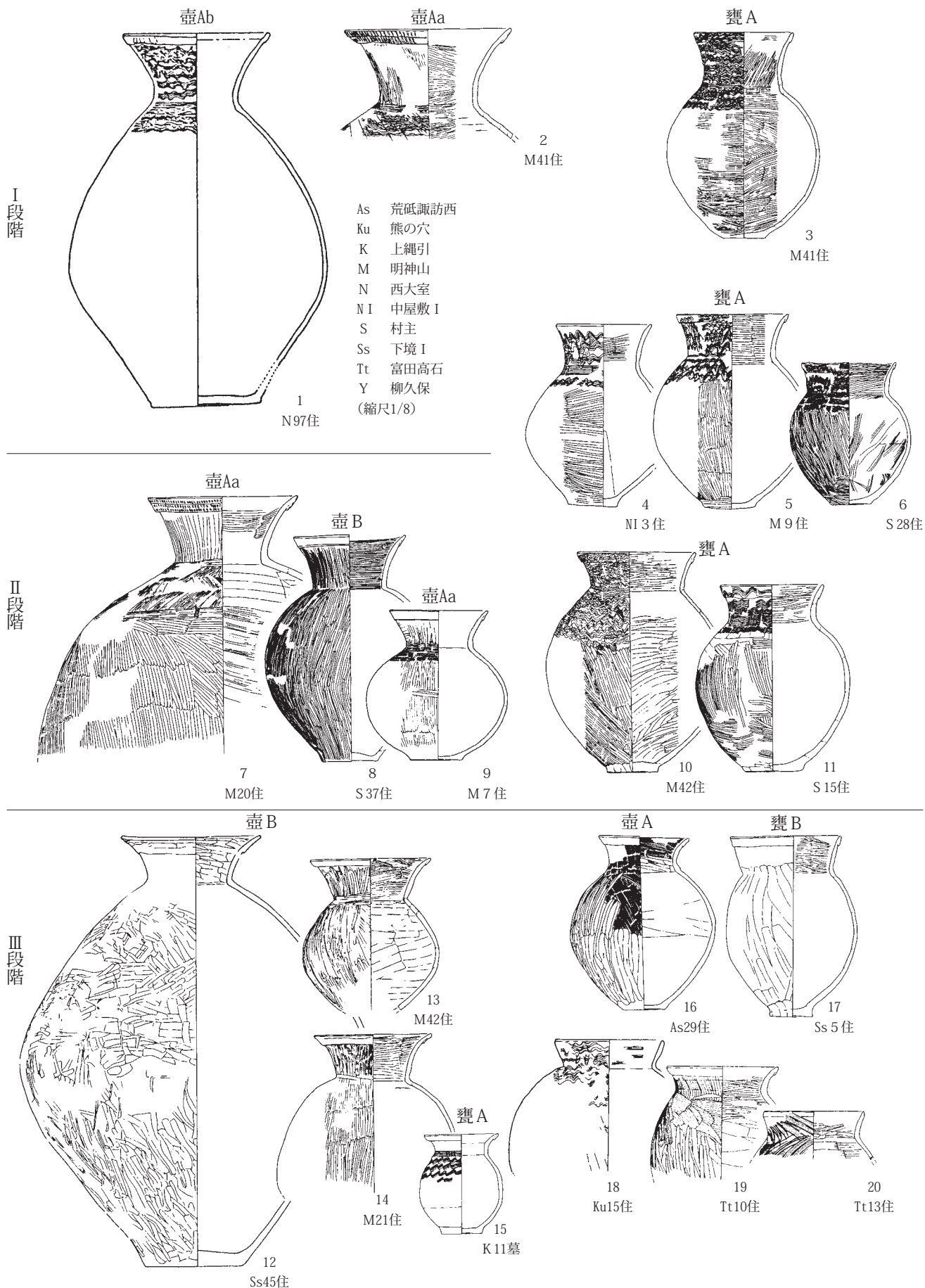
- I 段階—(深澤)0段階—(若狭・深澤)弥生後期後半
- II 段階—(深澤)1・2段階—(若狭・深澤)古段階
- III 段階—(深澤)3・4段階—(若狭・深澤)新段階

さて、ここで設定した樽式土器の段階変遷を深澤編年の0～5段階区分に組み合わせて、赤城山南麓の樽系遺跡の時間軸上の位置づけを第1表に示した。ここでは、主体となる土器の変化過程を見るために、樽式・吉ヶ谷式・外来系に三分して、各々が主体となる一括資料があった段階を塗りつぶしてある。同段階で複数系統の土器が塗りつぶしてある場合は、主体となる系統の土器一括資料が同じ段階内に存在することを示す。また、「○」は単体や客体的な少数と判断したものを示してある。

まず0段階(筆者の樽3期新)では、富田西原・西大室(上縄引)・明神山の各遺跡が見られる。荒砥川右岸の富田地区では、このほかにも富田大泉坊A遺跡で1段階の壺A・甕Aが溝からまとまって出土している。赤城山南麓地域では、未だ樽式3期古段階以前の例を見ないので、この1段階(樽3期新)から後期弥生遺跡形成が始まったと考えてよい。また、山麓地形の最南端に位置する五目牛新田遺跡ではこの段階と後出する2・3段階でも樽式主体となっている。0段階での吉ヶ谷式主体の遺跡は堤頭遺跡など南麓地域でもやや標高の高い場所の遺跡で見られる。

1段階以降には、樽式を主体とする遺跡は富田地区と、西大室・明神山・内堀・東原B遺跡などが位置する赤城山南麓の南半中央地域で増加傾向を示す。なかでも明神山遺跡は隣接する中山A・中山B・東原B遺跡と本来同一遺跡と思われ、0段階から3段階まで樽式土器が主体的に継続する。なお、内堀遺跡では0段階にさかのぼる樽式甕が出土するが、遺構に伴う一括資料ではないため、主体か客体かは判定できない。1段階からは、南麓南半中央地域で吉ヶ谷式主体の土器群が見られるようになる。荒砥上ノ坊・内堀遺跡がこれに相当し、内堀遺跡では樽式主体の土器群と併存する。明神山遺跡では吉ヶ谷式が客体で存在し、同一地域内での両者の交流が始まったことをうかがわせる。なお、1段階では外来系土器が伴うが、小型器台など限られた器種の単体参入とみられる。なお、この段階に喜多町遺跡(伊勢崎市)で廻間Ⅱ式期古段階の伊勢湾系土器群、および北陸系器台の存在が知られる。

2段階での特徴は、樽式がそのまま継続する中で、吉ヶ谷式を主体とする遺跡が南麓地域で増加することである。この段階からみられる遺跡に西大室上諏訪・中屋敷I・下境I・同Ⅱ遺跡があるが、限られた地域内での分布状況から、先行した荒砥上ノ坊・内堀遺跡からの分村と想定することも可能だろう。Ⅱ段階でのもう一つの特徴は、外来系土器群の急増である。伊勢湾系のS字甕B類(田口分類のⅡa類)や東海東部系の単口縁台付甕、北陸系の参入が明らかである。特に故地での組成のまま北陸系土器のみられる荒砥上ノ坊遺跡が注目される。なお、東海東部系土器群が卓越する三和工業団地・舞台遺跡で



第7図 赤城山南麓の樽式壺・甕の変遷

は、2段階から遺跡形成が始まっており、3段階にピークを迎えるようだ。2段階に始まる赤城山南麓地域への東海東部系土器の参入は、このような拠点となりうる遺跡との交流による可能性が大きい。

3段階は、外反する脚部を持つ有稜高杯や小型器台が定着し、二重口縁壺や直口壺など伊勢湾系を祖型とする形式が組成に多く加わる。ただし、樽式や吉ヶ谷式も無文型式で参画しており、決して客体的な存在とは言えない。なお、この時期に樽式の手法によると思われる有稜高杯・小型器台の模倣品が普及する。これは樽式に通有の碗形杯部の外面下端をへらで小さく削り取って段状に整形したもので(第8図)、赤城山南麓地域に分布することから、ここでは仮に「荒砥型模倣高杯・模倣器台」と仮称する。また、この段階で田口分類のS字甕Ⅲab類・Ⅳb類が伴出するが、南麓地域ではS字甕が組成甕の主体を占めることはない。むしろ、東海東部系の単口縁台付甕のほうが凌駕する。これは2段階と同様に三和工業団地・舞台遺跡との関係性が増大したためと理解できよう。

4段階での大きな特徴は、樽式土器群の消滅で象徴される。富田地区では主体を維持しているが、熊の穴・荒砥諏訪西・下境ⅠⅡ・東原B遺跡などでは最終段階に位置付けられる例が散見される程度である。一方、熊の穴・下境ⅠⅡ遺跡では、無文化した吉ヶ谷式が主体として継続しており、東海東部系や伊勢湾系が混在した土器群と共存する。

5段階では、赤城山南麓地域で遺跡そのものが消滅する傾向が顕著である。荒砥諏訪西遺跡では外来系、下境ⅠⅡ遺跡では無文吉ヶ谷式と外来系の併存という様相でみられ、樽式系譜の土器は全く見られない。

4 まとめ

ここまで赤城山南麓地域を中心とした古墳時代前期の遺跡の分布と様相変化を見てきた。これまでに判明した点を簡単にまとめておくこととする。

まず、遺跡分布については、以下のようにまとめられよう。樽式土器を主体とする樽系遺跡群が南麓地形の南半中央部を占め、その占地傾向は本願地である前橋台地の樽系遺跡群と同様である。石田川式土器の母体及びその古段階となる伊勢湾系土器群を主体とする遺跡は、この地域に形成されず、山麓の南方に広がる平野部に分布し、その北端部に樽系集落群と一定間隔をあけて喜多町遺跡や五目牛新田遺跡が存在する。東海東部系遺跡群は点在しつつも樽系遺跡群の分布域に接する場所に形成される。吉ヶ谷系遺跡の当初は山麓の高い地域に少数分布し、やがて南麓南半中央地域の樽系遺跡群の中に参入してくる。

土器様式ごとの遺跡の変遷では、以下の点が指摘できる。樽系遺跡は、弥生後期末の0段階から遺跡形成が始

まり、3段階まで遺跡数を減らさずに継続する。次の4段階では消滅する遺跡が多く、土器型式そのものの特徴も形骸化する。吉ヶ谷系遺跡は1段階から樽系遺跡群への進出をはじめ、2段階では同一地域内で共存・共住が明瞭となる。4段階以降は遺跡数が激減しながらも少数遺跡で継続する。外来系遺跡では、荒砥上ノ坊や内堀遺跡を先駆として2段階から遺跡分布が急増する。そこでの土器群は東海東部系が多く、伊勢湾系は客体的である。5段階では、遺跡数そのものが激減し、荒砥諏訪西・下境ⅠⅡ遺跡などで外来系土器主体の遺跡が存在するのみになる。

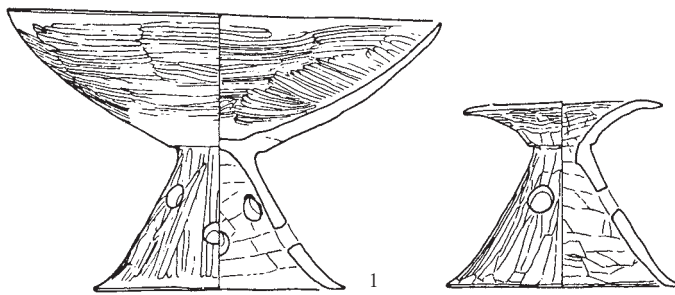
「はじめに」で述べた課題の一つに、群馬県東部では石田川式土器の前に参入する南関東系土器群についての検証があった。単口縁甕類を「南関東系」と見なすならば、当地域では3段階を盛期として2段階以降継続的にみられることから、石田川式の前段階に限った存在とは言えない。本稿では対象外としたが、群馬県内の石田川式土器は、母体となりうる廻間Ⅱ式期併行の土器群を含めて考えれば、1段階～5段階まで継続的に存在する。そのうち、S字甕の広範な普及・定着に象徴される急激な分布域の拡大は3期以降のことと考えられる。この動向と連動して、赤城山南麓地域でも伊勢湾系土器群の参入が増え、在地化した模倣品も製作されるようになる。ここにみられた遺跡分布の様相から、石田川式土器を主とする伊勢湾系遺跡群は、赤城山南麓地域まで分布を広げることなく、地域分けをして併存していたことが明らかである。外来系土器群の中では、東海東部系と先行して存在した吉ヶ谷式が赤城山南麓地域へ積極的に参入したことで、異系統集団の共存状態が想定される。

以上のようにまとめられた赤城山南麓における古墳前期の様相は、おおむね若狭・深澤がすでに指摘した結論に近い。ここでは、特に在来の樽系遺跡群の存在期間を絞り込めたこと、外来系土器群の中でも系統の異なる土器群から色分けした遺跡群が、緩やかといってよい程度の地域分けの中で併存したことを示せたと思う。このことを、樽系集団の側からまとめなおすならば、次のようになろう。弥生後期末頃に赤城山南麓地域に移転した集団が、樽式土器の伝統を保持しつつ3段階まで継続的な営みを続けた。この間に北陸系の小集団との接触、吉ヶ谷系集団や東海東部系集団の地域内参入があり、2～3段階までの期間に併存・共生の状況が現出した。3段階の末に急激に遺跡が消滅し、4段階以降はわずかな集団が残るだけになった。そして5段階では樽式土器の伝統は全く失われてしまった。

古墳時代社会の形成にあたって、赤城山南麓に居を構えた集団が積極的に参画する画期を、この遺跡群動向の中に探るならば、3段階のなかでその動きが始まり、4段階では移住を伴う地域社会の大きな変動をうかがうこ

第1表 赤城山南麓の遺跡と土器の推移

遺跡名	出土遺構	土器様式	樽3期新 0	1	2	3	4	5	備 考
富田大泉坊 A	溝	樽							
		吉ヶ谷		○					
		外来系		○	○				器台、高杯、壺、平底甕
富田西原	住居	樽							
		吉ヶ谷							
		外来系							伊勢湾系、東海東部系
富田高石	住居	樽							甕B、高杯、佐久系樽式甕
		吉ヶ谷				○			
		外来系							S字甕模倣品
西大室 (上縄引他)	住居 墓	樽							
		吉ヶ谷				○			
		外来系	○						器台、有稜高杯、畿内小型壺
西大室 上諏訪	住居	樽			○				壺A、甕AB
		吉ヶ谷							
		外来系							
明神山	住居	樽							
		吉ヶ谷		○					
		外来系		○	○				模倣有稜高杯、装飾器台
村主	住居	樽							
		吉ヶ谷			○	○			
		外来系							S字甕なし
熊の穴	住居	樽					○		
		吉ヶ谷							
		外来系							
中山B	住居	樽							
		吉ヶ谷				○			
		外来系				○			
荒砥 上ノ坊	住居	樽				○			
		吉ヶ谷							
		外来系							S字甕客体
荒砥諏訪西	住居	樽					○		壺B
		吉ヶ谷					○		
		外来系							
荒砥前田Ⅱ	住居 谷	樽	○			○			壺B
		吉ヶ谷				○			
		外来系							
内堀	住居	樽			○				
		吉ヶ谷					○		
		外来系		○					2期にS字甕。単口縁台付甕多い
荒砥前原	住居	樽							
		吉ヶ谷							
		外来系							東海東部～南関東系、十王台式
下境ⅠⅡ	住居	樽			○		○		壺B、甕B
		吉ヶ谷							無文甕
		外来系							供献器種主体
堤東	墓	樽							
		吉ヶ谷				○			
		外来系							在地二重口縁壺、S字甕
中屋敷Ⅰ	住居	樽			○	○			壺A、甕A
		吉ヶ谷							
		外来系			○				北陸北東、南関東系
東原B	住居	樽					○		
		吉ヶ谷				○			
		外来系		○	○				4期にS字甕
鶴谷	住居	樽				○			
		吉ヶ谷							
		外来系							
蟹沼東	住居	樽			○				壺
		吉ヶ谷							
		外来系							
五目牛 新田	住居	樽							壺A・B
		吉ヶ谷	○						
		外来系			○				S字甕主体
三和工業 団地	住居	樽							
		吉ヶ谷							
		外来系							東海東部系
波志江 中野面	住居 墓	樽				○			壺B
		吉ヶ谷				○			
		外来系							
堤頭	住居	樽	○	○					壺、甕、台付甕
		吉ヶ谷							
		外来系		○					器台のみ



第8図 「荒砥型模倣高杯・器台」及び稜線部分写真 明神山遺跡 16号住

とができよう。この動向は、石田川式土器が群馬県東部に広範な展開を始める時期とリンクするのは間違いないところであろう。

なお、本稿では簡単に紹介するにとどめたが、仮称「荒砥型模倣高杯・器台」(第8図)については、改めて類例を集めたうえで検討を進めたいと考えている。「荒砥型模倣高杯」は、樽式の高杯製作技法によって東海西部系の有稜高杯を模倣したものである。本来の有稜高杯が杯部底面を円板状としたうえで積み上げ整形するのに対し、「荒砥型模倣高杯」では浅い碗形杯部と外反円錐形脚部を結合してから、杯底外面をわずかに削り出すことで稜としている(第8図-1、写真)。これ以外にも器面調整のミガキは樽式高杯と同様の横位で施される。「荒砥型模倣器台」もまた同様の手法によっている(第8図-2)。新たな器形と器種をホームメイドによる土器生産に取り込んだものであり、製作技法上の伝統は失っていないと評価できる。同様の模倣形式は各々の地域で存在したと憶測している。その背景に在来弥生集団の面影がぼんやりとでも見えてくるものと期待している。

参考文献

- 赤塚次郎 1987「逍遙する土器」『欠山式土器とその前後 研究報告編』p.51-64
 赤塚次郎 1990「考察」『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター p.50-132
 赤塚次郎 1997「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター p.79-95
 赤塚次郎 1999「三世紀への加重—古墳時代初頭の様式変動と共鳴」『考古学フォーラム』11 p.44-57
 浅井和宏 1986「＜宮廷式土器＞について」『欠山式土器とその前後』p.318-336
 飯島克己・若狭 徹 1988「樽式土器編年の再構成」『信濃』44-6 p.28-51
 石野博信 1993「土器の移動が意味するもの」『転機』4 p.15-27
 石丸敦史 2005「上野地域の古墳時代前期における土器製作の様相」『古文化談叢』54 p.51-78
 梅沢重昭 1971「Ⅳ考察3 住居址出土の土師式土器」『太田市米沢ニツ山古墳』群馬県教育委員会 p.26-31
 梅沢重昭 1978「Ⅵ考察」『群馬県太田市五反田・諏訪下遺跡』太田市教育委員会 1978 p.36-48
 大木紳一郎 2020「群馬県における弥生時代後期の土器について」『研究紀要』38 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 p.31-50
 大塚初重・小林三郎 1967「群馬県高林遺跡の調査」『考古学集刊』3-4 p.57-76
 大野勝美 2004「銅鐸型土製品考」『静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論文集』p.163-184
 小田木治太郎 1982「北陸東部における古墳時代開始期の土器様相」『石川考古学会誌 北陸の考古学Ⅱ』32 p.129-166
 加部二生 2010「大間々扇状地における弥生時代～古代の遺跡」『群馬県大間々扇状地の地域と景観』p.33-44
 柏瀬拓巳 2020「関東平野北部における古墳出現期の地域相」『考古学集刊』16 p.107-128
 加納俊介 1990「S字甕とS字甕もどき」『マージナル』10 p.19-28
 加納俊介 1998「S字甕の波及と定着」『静岡の考古学』p.99-110
 川崎みどり・鈴木とよ江・浅岡優・西島庸介 2013「鹿乗川流域遺跡群の土器編年」『考古学フォーラム2013 変貌する弥生社会』p.45-62
 川村浩司 1993「北陸北東部の古墳出現期の様相」『日本考古学協会シンポジウム「東日本における古墳出現過程の再検討」』発表資料
 川村浩司 1998「Ⅵ付論2 土器の交流から見る北陸地方と群馬県地域」『第2回特別展図録 人が動く・土器も動く』かみつけの里博物館 p.44-47
 川村浩司 1999「庄内並行期における上野出土の北陸系土器について」『庄内式土器研究』19 p.1-30
 小島純一 1983「赤井戸式土器について」『人間・遺跡・遺物』p.221-247
 小林健二 1998「甲斐における土器群の画期と交流」『庄内式土器研究』16 p.29-38
 小林行雄 1935「小型丸底土器小考」『考古学』6-1 p.1-6
 今平利幸 1998「下野における土器群の画期と交流」『庄内式土器研究』16 p.79-94
 今平利幸 2000「下野における古墳前期外来系土器の波及と定着」『栃木県考古学会誌』21 p.63-84
 今平利幸 2003「古墳時代前期の「下野」の地域性」『塙静夫先生古稀記念論文集 栃木の考古学』p.168-189
 鈴木敏則 2001「弥生時代後期における三河・遠江系土器の拡散」『第9回春日井シンポジウム「東海学」を深める～弥生から伊勢平氏まで～』p.33-45
 高橋浩二 1999「S字状口縁台付甕の伝播とその評価」『国家形成期の考古学』p.367-381
 滝沢規朗 1993「越後における古墳出現前後の土器様相」『新潟考古学談話会会報』11

- 田口一郎 1981「XI 遺物の検討」『元島名將軍塚古墳』高崎市教育委員会 P 84-105
- 田口一郎 1987「パレス・スタイル壺の末裔たち」『欠山式土器とその前後 研究報告編』 p.95-112
- 田口一郎 1998「VI付論 4 新たな土器が成り立つとき」『第2回特別展 図録 人が動く・土器も動く』かみつけの里博物館 p.52-54
- 田口一郎 2000「北関東西部におけるS字口縁甕の波及と定着」『第7回 東海考古学フォーラム S字甕を考える』 p.94-103
- 田口一郎 2001「東海系土器の末裔たち」『第9回春日井シンポジウム『東海学』を深める～弥生から伊勢平氏まで～』p.47-55
- 土井翔平 2015「東日本における古墳出現期の二重口縁壺製作技法に関する一考察」『考古学集刊』11 p.59-76
- 友廣哲也 1991「群馬県における古墳時代前期の土器様相」『群馬考古学手帳』2 p.53-77
- 友廣哲也 1992「群馬県古墳文化初頭期の検討」『古代』94 p.224-242
- 友廣哲也 1994「北関東の古墳時代文化の受容」『古代』98 p.110-135
- 友廣哲也 2004「集落からみた古墳時代毛野の社会背景」『研究紀要』22 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 p.237-250
- 友廣哲也 2004「北関東古墳時代前期土師器の様相から見た古墳時代社会の成立」『古代』112 p.53-85
- 西川修一 1995「東・北関東と南関東－南関東圏の拡大－」『古代探叢』IV p.175-208
- 沼津市教育委員会 2012『高尾山古墳発掘調査報告書』
- 橋本博文 1993「関東北部における古墳出現前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』シンポジウム資料集 p.30-32
- 原田 幹 1998a「伊勢湾地域における土器群の画期と交流」『庄内式土器研究』16 p.13-28
- 原田 幹 1998b「VI付論 3 伊勢湾地域からの拡散と群馬県地域」『第2回特別展図録 人が動く・土器も動く』かみつけの里博物館 p.48-51
- 原田 幹 2000「S字甕の波及と定着をめぐる問題」『S字口縁甕波及期の様式変革と集団動態』第7回東海考古学フォーラム S字甕を考える』 p.69-80
- 比田井克仁 2004「古墳時代前期における関東土器圏の北上」『史館』33 p.101-137
- 比田井克仁 2004『古墳出現期の土器交流とその原理』
- 深澤敦仁 1998「上野における土器の交流と画期」『庄内式土器研究』16 p.95-109
- 深澤敦仁 1999「赤井戸式土器の行方」『群馬考古学手帳』9 p.1-14
- 深澤敦仁 2008「太田地域における古墳時代前期の土器編年試案」『成塚向山古墳群』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 p.448-471
- 増田逸朗 1997「古墳出現期の北武蔵一前方後方墳成立の要因一」『調査研究報告』10 埼玉県立さきたま資料館 p.1-20
- 松島栄治 1968「石田川式土器の設定に関する考察」『石田川』p.83-89
- 松島栄治 1986「喜多町遺跡」『群馬県史 資料編 2 原始古代 2 弥生・土師』p.603-605
- 右島和夫 2003「毛野の成立」素描『群馬県立歴史博物館紀要』24 p.17-30
- 三宅敦気・相京建史 1982「樽式土器の分類－榛名山東南麓を中心として－」『第3回三県シンポジウム資料 弥生終末期の土器 四世紀の土器』群馬県考古学談話会
- 森岡秀人 1993「土器移動の諸類型とその意味」『転機』4 p.29-45
- 若狭 徹 1990「群馬県における弥生土器の崩壊過程」『群馬県考古学手帳』1 p.11-32
- 若狭 徹 1998「VI付論 1 群馬の弥生土器が終わるとき」『第2回特別展 図録 人が動く・土器も動く』かみつけの里博物館 p.41-43
- 若狭 徹 2000「S字口縁甕波及期の様式変革と集団動態」『第7回東海考古学フォーラム S字甕を考える』 p.50-61
- 若狭 徹 2002「古墳時代の地域経営」『考古学研究』49-2 p.108-127
- 若狭 徹・深澤敦仁 2005「北関東西部における古墳出現期の社会」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』発表要旨
- 若狭 徹 2018「東国における古墳時代地域経営の諸段階」『国立歴史民俗博物館研究報告』211 p.307-350
- 渡井英誉 1998「大廊式土器小考」『庄内式土器研究』16 p.39-58
- 渡井英誉 1999「中身代式土器小考」『東国土器研究』5 p.293-304
- 渡井英誉 2000「東駿河のS字甕」『第7回東海考古学フォーラム S字甕を考える』 p.104-113
- 渡井英誉 2000「芙蓉の甕」『静岡県考古学研究』p.57-71